

△論文▽

エゼキエル書に於ける神

——語りかける神——

服 部 嘉 明

序

旧約聖書の各書について言えるように、エゼキエル書にも、独特のものとは言えなくても、強調的と言い得る思想がある。この小論文は、神という点に焦点を絞りつつ、その代表的な神概念を二つの面から観察追求しようとするものである。その第一は本書に使用されている言語—文脈的表現の考察を通してであり、その第二は聖書思想的本文の考察を通してである。(特に明記されない限り、聖句の引用はヘブル語聖書の章及び節の表示によるものとする。)

本 論

一 言語—文脈的表現(神の名)

Michaud は旧約に於ける名前について次の如く述べている。「旧約聖書において、名前は、単なるラベル、ほんの

外面的描写ではなくて、名をおびている者の深い実体を表現する。「この事は神の名にもあてはまることであり、エゼキエル書に於いて用いられている神の名前は、神概念の追究に不可欠な資料を提供してくれると思われる。」

(一) 神の名に関する限り、最も頻繁に用いられ、しかも、預言書として神の主権が最もよく表現されている言葉はヤハウェとアドナイとを組み合わせたものである。アドナイ、ヤハウェの二つの神の名称が共に使用せられて、「私の主ヤハウェ」と訳し得る。通常「神である主はこう仰せられる」(新改訳)、又は、「神である主の御告げ」(新改訳)、「主なる神は言われる」(協会訳)が用いられている。エゼキエルはその書中にこのような表現を一〇四回にわたって使用している。この他にもヤハウェだけを用いて同じように神の語りかけを内容とする箇所は一八回に及んでいる。又、「主なる神の言葉を聞け」という表現で、アドナイ・ヤハウェが使用されている箇所は三回に及んでいる(六・三、二五・三、三六・四)。これはエレミヤと共にエゼキエルが如何に主権者として語りかけ給う啓示の神に強調点を置いているかを知ることが出来る。更に、アドナイ・ヤハウェが神の啓示を示す箇所として一回(八・二)用いられている。又、呼びかけとして二一・五と三七・三の二箇所用いられている。

(二) 最もバラエティーに富んだ用い方がされている神の名はヤハウェであり、主に次の如く用いられている(右記(一)に於けるいずれの用法も含めない)。A. B. Davidsonなどは「ヤハウェという名をどれだけのことが示唆されているかということは、おのおのの聖句から学ばなければならない」と言っている。

1 「そして、あなたがた(又は、彼ら)は私が主である事を知るようになる」

これは極めてエゼキエルの表現であって、やはり神の主権を表わすものとして理解されるような用い方をしている。④。エゼキエル書中では五十二回にわたって用いられ、少し言葉の表現を異にしながら同じ意味を示す箇所を合計すると六十四回に及んでいる。⑤。

2 「そして主の言葉が臨んで」

このエゼキエルのとも考えられ得る表現は、エゼキエル書中では五十回に及んでいる。このことも、預言者エゼキエルを神の言葉の代言人として理解する理由を提供すると共に、神は言葉をもって(語りかけをもって)御自身を啓示される方であることを示している。

3 「主の手が私の上に臨み」

七回にわたって(一・三、三・一四、二二、八・一八ヤド・アドナイ・ヤハウェ、三三・二二、三七・一、四〇・一)に用いられているこの表現は、預言者エゼキエルに与えられる神の啓示に伴う霊的体験を示すもので、エゼキエルの預言者意識の具体的表現と見るべきである。それは確かに特異性をもつ霊的経験ではあるが自己を見失った単なる恍惚状態ではない。批評家たちは特別な神の霊の感化を認めつつも、預言者の心理的恍惚状態を認容している。H. A. Redpath はエゼキエルの名前と関係つけて次の如く述べている。「これは、導く力を意味し、御手が臨んだ者に人間的力以上の力が与えられることを意味する。われわれはこれを、預言者の名前エゼキエル(つまり神が力づけ給う)と結びつけることができよう。⑥。それ故に、この神の名ヤハウェを用いた「主の手」という表現は明らかに預言者エゼキエルが啓示を受ける場合に於ける神の働きかけと理解されねばならない。内容的には主の霊ルーアハ・ヤハウェ(一・五)の機能と同じようである。⑦。

4 「主の栄光」

エゼキエル書中でのこの表現は十回にわたって用いられ(一・二八、三・二二、二三、一〇・四八二回、一八、一

一・二三、四三・四、五、四四・四⁽¹⁷⁾、幻を通して与えられる啓示の具体的(可視的)表現としている。この表現は旧約全体を通じて用いられ、特にエゼキエルのというわけではないが、エゼキエル書では特に啓示の神の崇高的權威を示すものとして用いられている。⁽¹⁸⁾一〇・一八の場合を除いては、⁽¹⁹⁾この表現はその前後どちらかに啓示としての語りがなされている。

5 「主の靈」

エゼキエル書中に於いて、ルーアハという言葉は二十五回にわたって用いられているが、「ヤハウェの靈」としてこの表現は一一・五と三七・一の二回のみである。⁽²⁰⁾その両者とも内容的には神の主権的な働きかけが求められている特異的な個所である(一一・五——ペラテヤに突然起こった死の事件の背景となるヤハウェの靈の働き、三一・一——枯れた骨の谷間の幻の中で起こるイスラエルの民の復活を示すヤハウェの靈の働き)。

6 「主の家」

この表現は六回にわたって用いられていて(八・一四、一六、一〇・一九、一一・一、四四・四、五)⁽²¹⁾、基本的に「ヤハウェの家」とはヤハウェの栄光の満ちあふれたる場所、即ち神の臨在の場を示すために用いられ、八・一四、一六、一一・一では、そのヤハウェの栄光に満ちているべき場所が汚されていることを示している。

7 「主の怒りの日」七・一九⁽²²⁾

ヨーム・ヤハウェ「主の日」一三・五

ヨーム・レヤハウェ「主の日」三〇・三⁽²³⁾

これらの「主の日」という表現は、すべての神の主権の具体的な行為である審判⁽²⁴⁾の思想を直接の背景としている。自らにつける民であるべきイスラエルの民、特に彼らを惑わす偽預言者たち、更にエジプトを始め他の諸国民を力強

く審く神が描き出されている。

8 ヤハウェ・エローヒーム「主であり、神である」

この神の名の二つの並行的用法は殆んどの場合、ヤハウェには主語としての主格代名詞アニーが付けられ神を指し、エローヒームにはそれと対照的に第二人称、又は第三人称の代名詞接尾語が付けられイスラエルの民を指している。即ち、二〇・五、七、一九、二〇、二八・二六、三四・二四、三〇、三九・二二、二八である。⁽²⁵⁾しかも、これらいずれの場合も、文脈上は勿論のこと、本文の位置からしても、主権者としての神とそれに属するイスラエルの民の関係を明確に示している。この「私は主であり、あなたがたの神である」⁽²⁶⁾「アニー・ヤハウェ・エローヘーケム」という表現は聖書神学的には契約思想(特に出エジプトの事件との関連において)を示し、⁽²⁷⁾主権者としての神と、忠誠を求められているイスラエルの民との関係をよく示している。

9 「主(ヤハウェ)」

エゼキエル書中には、ヤハウェが以上の分類に該当しない様々な方法、又は表現で用いられている。次の四種類に大別することが出来る。

- (1) 動作を示す主語として用いられ、特にアニー(私)が強調的に用いられている。一四・四、七、九、二一・四、一〇、三六・三六
- (2) 動作を示す主語として用いられている。⁽²⁸⁾八・一二、九・四、⁽²⁹⁾九、一一・二五、一三・六、七、⁽³⁰⁾二二・二八、二三・三六、三五・一〇、⁽³¹⁾三七・一、⁽³²⁾四四・二、五、⁽³³⁾四八・三五
- (3) 「主」の臨在の場所を示すために用いられている。四〇・四六、四一・二二、四二・一三、四三・二四(二回)、四四・三、四五・一、四、二三、四六・四、一二、一三、一四、四八・九

(4) その他。一一・一五、二〇・一、三三・三〇、三六・二〇
 (三) ヤハウエと比較する時、数的には非常に少なく用いられている神の名は、エローヒーム(又はエール)である。統計分析的に整理することは困難であるが、次の四種類に大別することが出来る。

1 「神(エローヒーム)の幻」

この表現は一・一、八・三、四〇・二に用いられている。一・一に於ける用法は文脈的に考えてもエゼキエルに与えられた預言者としてのこの召命時の啓示が幻を伴うものであることを明確に示している^④。それは明らかに荘厳な幻であり、荘厳、崇高性を示す複数形としての「エローヒーム」の名称が用いられるにふさわしい^⑤。八・三及び四〇・二の場合は一・一の場合とは文脈的にも異なった用い方がされていて、預言者エゼキエルが「神の幻」を見たのではなく、幻の中に彼エゼキエルに靈的経験が与えられたのである。Cookeはタルグムが示唆する如く、その区別を次の如くしている。『神の幻』という句は八・三と四〇・二にも出るが、意味は違ふ。その所有格は主語的で『神が与える幻』という意味であり、その幻の中で預言者はバビロニアからエルサレムへ運ばれる」(Cookeは一・一の場合の所有格は目的格であると見ている)。

2 「神(エローヒーム)」が神を示す主格(主語)としてアニーが用いられ、「神(エローヒーム)」には神とその民との関係を示す代名詞接尾語が第二人称、又は第三人称(複数)で付けられている^⑥。即ち、一一・二〇、一四・一、三四・三一、三六・二八、三七・二三、二七である。

3 エローヒーム及びエール

異邦の都市国家ツロのおごり高ぶりに対してなされる神の審判が宣言されているところの第二章(一一・一〇)に於いて用いられている特殊な文脈的用途である。「エローヒーム」と「エール」はイスラエルの神を表示する場合と、

異教の神々を表示する場合と相互共用的に使用されている^⑦。文脈の意味するところは、ツロの「おごり高ぶり」ということを考えれば、特に「神」であろうとする態度に注目すれば、その「神」のもつ崇高性がどこでも当然考えられる。エールはこの二八・二と二八・九に於ける二回の他には三一・一一で「諸国の民のうちの力ある者」(新改訳)としてネブカデネザルを指し、三二・二一では「勇敢な(勇士たち)」(新改訳)として複数形で一般の力強いものを指すために用いられている。

4 「神(エローヒーム)」

地理的場所を示すために用いられている。「神の園エデン」(二八・一三、三一・八△二回▽、九)、「神の山」(二八・一四、一六)、神の臨在を示す場所として含蓄的には神の崇高性を背景として用いられている。

従って、右記の四種類のいずれの場合も、エゼキエル書に於いては本来エローヒームが基本的にもっている一般に考えられる崇高性、又は荘厳性と調和的に「神(エローヒーム)」という表現は用いられている。

(四) 「アドナイ」が単独で用いられている^⑧。

エゼキエル書中には四回(一八・二五、二九、三三・一七、二〇)にわたって全く同じような文脈で用いられている。即ち、イスラエルの民が神の審判に対する不平として放つ言葉である。「主の態度は公正でない」(新改訳)との表現である^⑨。勿論「アドナイ」には「私の主」という意味があるが、エゼキエル書中のこの四回に及ぶ用途は、やはり文脈的にイスラエルの神の主権(特に審判という行為を通して)に反抗し、不平を述べもの姿として表現されている。

(五) 「全能者」

この神を指す表現はエゼキエル書中では、二回にわたって用いられている。一・二四ではシャッダイが単独で用い

られ、一〇・五ではエル・シャッダイ「大能の神」(協会訳)、「全能の神」(新改訳)、即ち神を示すエルという言葉と共に用いられている。文脈的背景は両者共、預言者エゼキエルが見た幻の中で、ケルビムが神の栄光を示しつつ翼を動かす時に起こる音の形容的表現として「神の語られる声のように」と用いられている。「力強さ」又は、「ドッサリした重さ」、「重量のある声」などがこの表現(シャッダイ)のもつ意味である。

従って、エゼキエル書中では、神の名に関する表現は大別して五種類が用いられている。1 アドナイ・ヤハウエ、2 ヤハウエ、3 エローヒーム又はエル、4 アドナイ、5 シャッダイ。しかも、これらの表現は、総括的には主に次のような四種の文脈に於いて用いられていることがわかる。(1)主権者(支配者)としての神、(2)啓示の神(語りかけと動作を通して)、(3)栄光に満ちたる神、(4)審判者なる神。

二 本文の聖書思想(代表的)

使用されている言葉の表現を通して、エゼキエル書で神についてどのような面が強調されているかを「神の名」という観点から考察したが、更に次の段階として、啓示内容の神学的考察を通して、エゼキエル書に於いて、「神」はどのように理解されているか(或いは、どのような点が特に強調されているか)を代表的と考えられる聖書の箇所(エゼキエル書)を具体的に取り上げて探求する。

(一) 啓示の神(語りかける神)

祭司の子であったか、或いは彼自身祭司であったと思われるエゼキエルが、預言者として神の召命にあずかった時、幻と共に最も強く印象づけられた神概念は、「語りかけ給う神」であった。記録されている最初のエゼキエルに対する神の語りかけは、「人の子よ。立ち上がれ。わたしがあなたに語るから」(二・一)であった。そこには主権者として厳粛な啓示を与え給う神が預言者エゼキエルと対称的に示されている。「立ち上がれ」は“stand upon thy feet”と直訳される。Eichrodtは「人の子」との呼びかけとの関連に於いて次の如く述べている。「この称号(人の子)がすでに……力ある主がその者のために大変なへりくだりを示し給うところのこの被造者の弱さを表現している。このような称号で呼ばれた人物が、立ち上がって主の前に出、主の命令を受けよ、と命じられるのだから、彼がそれを実行できるようにされるのは御霊の力によるに相違ない。」エゼキエルに与えられた預言者としての召命の最も中心的内容は神が御言葉を彼に与え給うたという事実である。勿論、第一章に於いて幻が神の栄光を示したと考えられるが、その中心は言葉を通しての神の啓示であった。具体的には第二章に御言葉の代言人として神は彼エゼキエルに迫り給うた。そこに描かれている神は、語りかけ給う神であり、啓示の神である。特に四節の「わたしはあなたを彼らに遣わす。あなたは彼らに『神である主はこう仰せられる』と言え」という表現、及び七節の「彼らが聞いても、聞かなくてもあなたは、わたしのことを彼らに語れ」という表現に、この語りかけ給う神がよく示されている。神は預言者エゼキエルをして、事情及び対象となる相手の態度の如何を問わず語らしめ給う方である。この事はその後続く八節以下、及び第三章に於いてより一層明確に示される。即ち、神が預言者エゼキエルに幻の中に啓示として与え給うエルサレム(ユダ)に関するメッセージの巻き物を食べ、咀しゃくし、そのメッセージを神の啓示として語ることが命ぜられている。ここでも強調されている点は神の言葉であり、神の語りかけである。神が与え給うメッセージのしるされた巻き物を食べることから強調的になり返されている(二・八、三・一八二回√、二、三)。主要な動詞を中心に本文を観察すると、いかにも詳細な説明的表現を好む祭司的なエゼキエルらしい書き方が見受けられる。直訳して要点を示せば次のようである。

開きなさい。あなたの口を(二・八)。
食べなさい。私があなたに与えるものを(二・八)。
それは巻き物の本であった(二・九)。

彼(神)はひろげた。それを私の前に(二・一〇)。
あなたの見つけるものを食べなさい(三・一前半)。
食べなさい。この巻き物を(三・一後半)。

私は開いた、私の口を(三・二前半)。

彼(神)は私にこの巻き物を食べさせた(三・二後半)。

食ふよ(三・三前半)。

私はそれを食ふた(三・三後半)。

行け。出かけよ(三・四前半)。

語れ。私の言葉に従って(三・四後半)。

ここでは、「食ふ」という表現もくり返されてはいるが、単なるくり返しでなく、エゼキエルらしい進展性が見られる。しかも、これらの節の表現の中で語りかけ、及び働きかけは主権的に動作をなす神であり、預言者エゼキエルはただ神の命令に対して二つの動作をもって服従するだけである(三・二前半、三・三)。イザヤの聖き神の概念が彼の召命との関連に於いて「イスラエルの聖なる方」という表現をもって強く印象づけられたように、エゼキエルの召命時に於けるこの経験は言葉をもって語りかける神(更にその語りかけの内容は二・一〇が示す如く審判を与え給う神)は、エゼキエル書全体に見られる神概念である。この語りかける神は、エゼキエル書中では三・一七―二

一、及び三三・二―九に於ける神の代言者を見張り人として立てられる神概念にも見ることが出来る。

(二) 審判の神

語りかける神のメッセージは、エゼキエル書に関する限り、エルサレム滅亡についての審判を内容とし、第三章以後に次第に明るさを増して述べられ、回復と終末の希望も、その審判の思想を前提、又は土台としている。事実、旧約聖書中「審判」という言葉はエゼキエル書に於いて最も多く用いられている。それ故にエゼキエル書中に於いて審判の神の概念は幾箇所にも見いだし得るが、その特徴的な例をあげれば次のようである。

1 無条件的滅亡審判(五・一一―一七)

預言者エゼキエルが(エレミヤと共に)捕囚期にあって神からの真の預言者として語らねばならなかった審判のメッセージの中心は、聖都エルサレムの無条件的滅亡であった。この事には大きな障害があった。それは預言者イザヤによって具体的に形成せられた聖都エルサレムの不可侵性についてエルサレム(ユダ)の住民たちが保持していた誤った宗教的樂觀主義であった。エゼキエルは、エルサレムに向かってはその罪を悔い改めて神に立ち帰るならば審判としての破壊をまぬがれることが出来るとも、悔い改めよとも言わなかった。エゼキエルは人々に好まれなくても、神よりの審判のメッセージをそのまま神の代言者として忠実に語った。エゼキエル書第五章はそのような無条件的滅亡審判を神が預言者エゼキエルに啓示されたものとして最も典型的なものであると考えられる。それはまずエゼキエルに命じられる象徴的行為によって始まる。即ち、理髪師のかみそりとして鋭い剣を取り、頭の毛をそり、その毛を風に散らし、或いは火に投げ入れる行為である(五・一―四)。神はそうすることにより、エゼキエルにその啓示する内容はエルサレムに対する審判の姿であることを明示された(五・五―一七)。

「あなたは鋭い剣を取り、それを床屋のかみそりのように使って」(新改訳)の本文は、エルサレムに加えられる審判としての破壊が如何にきびしく完全なものであるかを預言的に啓示している。この事は本文を観察すると釈義的に二つの面から言い得る。(1)「床屋のかみそり」の言葉の位置は、強調的と考えられると共に、目的格を方法あるいは手段を示す目的格として理解する。(2)最切の動詞「……を取り」の直接目的となる語は「鋭い剣」であって「床屋のかみそり」でない事実。しかも、「剣」は破壊性を示し、「かみそり」は機能という点から完全性を示している。二節に於いては三等分された第一の部分が町の中で燃える火で焼き尽くされる。しかも、この節の前半の最後の部分(ザーケーフ・カートーン以後アスナーハマまで)が示している如く、第四章に於いて啓示されているように、悲惨そのものであるエルサレムの包囲が終わってから更にこの審判が行なわれるというのである。包囲そのものが悲劇であるにも拘わらず、更に審判が火によってなされるというのである。五・一二が説明する如く、疫病又はききんによる滅亡を示しているとも考えられる。更に、第二番目の三等分の一の部分は剣で滅ぼされるというのである。これはエルサレムの陥落の寸前、又は直後にその町からののがれようとして殺された者たちを示していると考えられる。恐らくゼデキヤ王の一行もその中に含まれていたと思われる(Ⅱ列王二五・四以下)。又、最後の三等分の一の部分として示されているエルサレムの人々は散らされてバビロンを始め諸外国に連れ去られて行くというのである。恐らく、紀元前五八六年のエルサレム陥落の時に連れ去られた人々についての預言であろう。彼らは散らされたが、エレミヤによって預言された如く(エレミヤ九・一六)剣によって滅ぼされた者たちであろう。もし、聖書本文の表現に注意するならばこの象徴的行為として示された三等分という言葉は最初の三分の一を示す場合には定冠詞がなく、第二と第三の三等分の一を示す場合には定冠詞が付けられている。この事はただ単なる文法的な意味づけのみでなく、エルサレムの住民の全体性を示すものとして理解することが文脈上必要である。即ち、神はエルサレムを結果的には全体的に審判し、

破壊されることを示している。即ち、エルサレムに関する限り、神はエルサレムを無条件に審判し、無条件に破壊をもたらされるのである。各地に連れ去られると言われている最後の三等分の一については、次の四節に「そのうちからいくらかを取って……」としるされているが、「その中から」とは文脈的に「その第三、即ち最後の三等分の一の中から」との意味に理解出来る。RSVは“from them”と訳している。他面このミッシヤムは少し解釈的ではあるが散らされた(又は連れ去られた)地理的な各地とも理解しうる。いずれにしても、本文の釈義的内容を啓示という面からみるならば大差はなく、エルサレムから他の地のがれる者も(歴史的には恐らく紀元前五八六年のエルサレム陥落時を指すと思われる)その大多数は審かれて滅ぼされるというエルサレムに対する無条件的滅亡審判を示している。五節が示す如く、これがエルサレムについての預言であり、この第五章の残部はこの既述の象徴的行為の説明を与えている。

それ故に、結論的には、エゼキエルに対して与えられた神の審判の啓示はエルサレムに関する限り、それは無条件的滅亡であり、そこには本当の意味での希望はなく、希望は既にバビロニヤで捕囚となっている(紀元前五九七年に連れ去られた)イスラエルの民の中にあつた。

2 個人的罪責と審判(一八・二一—三三又は三三・一〇—二〇)

エゼキエル書中で特に著しい特徴、又は強調点として示されている審判に関する神概念は、神は人間個人を基本的な単位対象として審き給うという点である。勿論、エゼキエルがこの点についての個人主義の発唱者でもない。この点では多くの注解者たちの意見の一致を見ている。それにも拘わらずエゼキエル書中には(少なくとも強調点として)個人性の問題が神の審判概念との関連に於いて特徴づけられて啓示されている。それには当時の歴史的背景があつた。神は誤った罪と刑罰の概念をもっているような時代にあつて預言者エゼキエルを通して、人は個人的に神の前

に立って自己の存在を問われ、責任を取らねばならないことを示し給うた。当時のエルサレムの住民たちは既にサマリヤの滅亡（紀元前七二二年）について知識をもち、神が彼らを審き給うたことも知っていた。紀元前五九七年には自分たちの同胞である指導者たちや、技術者たちは捕囚として遠くバビロンに連れ去られた。彼らにも具体的に苦難が迫っていた。それにも拘わらず彼らは「父が酸いぶどうを食べたので、子どもの歯が浮く」という諺を都合よく利用して自分たちの罪意識を不明瞭にしていた（エゼキエル一八・二）。そのような態度はバビロンで捕囚となつてゐる人々の間にも見られ、彼らに一種の運命論的な絶望感を与えていた。そのような彼らに、神はエゼキエルを通して罪に対する神御自身の審判の基本原理を明示された。即ち、「罪を犯した者は、その者が死ぬ」（一八・四）である^⑨。これを基本概念として二つの内容が誤つた罪と刑罰の概念に対する是正として啓示されている。

(1) 年代的報復概念の是正（一八・五—二〇）

父と子との関係（更にその孫との関係）に於いて罪の刑罰は個人的に与えられるものであつて父の受けるべき刑罰をその子が受けるのではないことを強調している。この事は必ずしもエゼキエル書に於いて集団的報復の審判概念が完全に否定されていることを意味しない^⑩。その時代がその時代にあつて神の前に個人として誠実をもつて生きることが勧められている。五・一九—二〇はその結語と考えられる。

(2) 非現実的審判概念の是正（一八・二—三三）

エゼキエル書では義人と悪人との差別はその各個人の過去によつて決定されるのではなく、今という現実の「時」に於いてその個人が神の前にどのような関係にあるかによつて決定されるというのである。従つて、そこには、悔改めが全てのものに強調的に求められている（一八・二三、二八、三〇、三三）。Beverはこれを「道德生活のアトミズム」と特徴づけている^⑪。一見そのような審判思想は不道德な、又は無秩序な社会生活を生み出すと思われるが、神がその

時代にエゼキエルをして強調されたのは、個人の神との関係が確立される時、初めてその個人の集団としての社会生活が道徳的に高められるという真理である^⑫。これはある面では新約的であり、パリサイ、祭司長、民の長老たちに「取税人や、遊女たちの方があなたがたより先に神の国にはいるのです」（マタイ二一・三二）と言われたイエス・キリストの御言葉の原理にも通じるものである^⑬。

これらの二つの内容は、神の審判思想としてエゼキエル書に於いて特徴づけられていて、その両者の調和を根底にもつてこそ初めてエゼキエル書に於ける罪及び審判の個人性が正しく文脈的に理解される^⑭。勿論、ここで神義論の解決を見いだすことは出来ない。ただ神の主権ということ（一八・四、二五、二九）がその問題の解決の道を開いている。この第一八章の主題と全体は次のページの如く図示することが出来る。

結 語

四八章にわたるエゼキエル書を通して神が啓示し給う内容は、勿論以上述べてきた事柄だけではない。又、神概念について考えても以上論じた事柄だけではない。しかし、エゼキエル書に於いて最も顕著に啓示されている内容は、神概念に関する限り、「語りかけ給う神」と「審判の神」である。「語りかけ給う神」は歴史（人間世界）との接点を見いだし給う主権者なる啓示の神である。エゼキエルはその神ヤハウェの代言人として立てられたのである。エゼキエル書の本文の表現と預言者エゼキエルの生涯（特にその出発点としての召命）は「語りかけ給う神」としてヤハウェを描いている。更に、その神の語りかけのメッセージの中心は審判（主にエルサレムに対する破滅に関して）、又は預言であり、神は審判の神として示されている^⑮。審判を語りかける神がエゼキエル書の神と言ひ得る。